

第249回 今月読んだ本

福本和夫 思想の再解釈

ー「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ（2）

第1章 マラトとピッピの笛

ー出生から大学卒業まで（1894ー1920）

福本の自伝は2種類ある。『革命は楽しからずやー回顧録・霧笛編』（教育書林、1952年）と『革命運動裸像ー非合法時代の思い出』（三一書房、1962年）である。この2冊は再編集され、1977年にインタープレスから『革命回想』の『第1部 非合法時代の思い出』『第2部 昭和の大獄』として刊行された。

私の手元にあるのは、1952年の教育書林版と1962年の三一書房版の復刻、すなわち『福本和夫自伝Ⅰ 革命は楽しからずやー回顧録・霧笛編』（こぶし書房、2003年、以下『霧笛』と略す）と『福本和夫自伝Ⅱ 革命運動裸像ー非合法時代の思い出』（こぶし書房、2004年、以下『裸像』と略す）である。

『霧笛』は1952年に刊行されたこともあり、生い立ち、3.15事件（1928年）による逮捕、16年半にわたる獄中生活などが回顧される。しかし、読者が最も知りたいであろうコミンテルンによる弾劾（27テーゼ）の経緯については、ごく簡単に書かれているだけである。敗戦からわずか7年しか経っておらず、戦前の生々しい政治の裏話は避けたのであろう。「本書は、私の半生の半面を語ったものにすぎない。本書に記録しなかった他の半面については、いつかまた、あらためて、語る機会があるであろう。」（「あとがき」、401頁）

『霧笛』の10年後、1962年に刊行された『裸像』は読者の期待を裏切らない。思想的デビュー、共産党の再建、下獄、釈放後の活動など、内容は自らの社会主義運動（思想面も含む）への関与に限定されている。27テーゼから35年、一代を30年とすれば、現役世代にとっては親世代の出来事である。「ああ、そんなこともあったな」と思えるくらいには時は流れている。福本の語り口は率直でまわりくどさがない。

ここでは、『霧笛』と『裸像』を主に参照しながら、福本の足跡を追っていきたい。本稿末尾には略年譜、著書一覧、参考・引用文献を付した。

1 故郷ー倉吉中学校卒業まで

福本和夫は1894（明治27）年7月5日、鳥取県東伯郡下北

条村（現北栄町）田井に、父信蔵、母もんの三男として生まれた。日清戦争（1894年7月25日—1895年4月17日）が始まる3週間前であった。

「村のまんなかを東西に通じる国道に、東、鳥取へ十三里、西、米子へ十二里何十町と書かれているのをおぼえている。」（『霧笛』23頁、一里は約3.9キロメートル）「国道」とは京都と下関を結ぶ現在の国道9号線であるが、福本が生まれた当時は「国道二十八號」（1885年内務省告示第6号、山陰道の一部）と呼ばれていた。山陰本線下北条駅が開業したのは1915年であり、旧制高校（第一高等学校）進学のため故郷を離れていた。

日本海から1.3キロほど南の田井集落は、鳥取県内では鳥取砂丘に次ぐ大きさの北条砂丘の中に位置している。60戸ばかりの小さな村は海の近くに分村（浜村）を有していた。

生家は小地主兼自作農であった。屋号は「木綿屋」で「田井のモメンヤ」で通っていた。祖父の代までは砂丘の平坦部は一面の綿畑で、自作の綿花と近在のものを米子まで行って売りさばいていたという。物心つく頃には綿作はすっかりすたれてしまい、綿畑は養蚕のための桑畑になっていた。

生家は分家で、曾祖父（旧姓田中）が独立するとき福本の姓を名乗った。田井には福本姓はなく、中学、高校、大学でも同じ姓に出会ったことはなく、大学時代、大山郁夫（1880—1955、政治学者、左派の著名な政治家）の旧姓が福本であったことを知って驚いたという。

和夫という名にも大学まで出会ったことがなかった。父が明治大学の法律学講義録を取り寄せて熱心に読んでおり、法学博士の鳩山和夫（1856—1911、外務次官、衆議院議長、東京専門学校（現早稲田大学）校長を歴任、子の一郎、曾孫の由紀夫は首相）から名前を取ったのではないか、と福本は推測する。

母の生家は田井から東へ2.5キロほどの中北条村（現北栄町）江北にあり、福本家より少し豊かな小地主兼自作農であった。

福本は長女の逸子^{いつこ}によるエッセイ「苦難の道」（『民主評論』新年号、民主評論社、1949年、小島亮編『福本和夫の思想—研究論文集成』こぶし書房、2005年、所収）を引用して、母の人となり进行回想する。文中の祖母は和夫の母もんである。

女にはめずらしく気丈夫であった祖母は、七人もの子供を、それぞれ専門ないし大学教育をうけさせ、ようやく自立してゆけるようになったところで、父が投獄されたのだから、そのごの苦労は並大抵ではなかったのであろうし、孫のわたしまでも育てながら、けっして涙一つ、ぐち一つこぼしたことはなかった

のを、今もおもいだしながら感心している。がんらい祖母は無信仰で、氏神の秋まつりに親類のお客はあるが、自身は神社へまいりもせず……（信仰に関わる村の行事には一岩田補足）ゆくこともなかった。（中略）祖母が病床にたおれるまでの長い年月、ただの一度も欠かしたことがなく毎朝、玄関のところで、両手をあわせて、東西南北をぐりとまわっておがんでいた。ある時、わたしが不思議におもって、おばあさん、なんでそんなことをしておがむんだいな、とたずねたことをおぼえている。たしかわたしが十歳ごろのことであった。そうしたら、祖母は、お父さんが元気であるようにおがむんだがなあ、としみじみこたえてくれた……。

わたしが父の実妹である叔母の嫁ぎさきへあそびにいっていた時、叔父が叔母に、田井の家は無信仰だから兄さんのような人がでたんだよ、と話しているのを、こっそり盗み聞きしたことがあった。（『霧笛』29頁）

母の思い出は続く。父について語らないのとは対照的である。福本が小学校の頃、腸チフスにかかって村の避病院（隔離病舎）に送られたことがあった。看護師に任せておけないと言って、母はつきっきりで看病してくれた。夜になると林の中でフクロウが鳴く。それがなにより寂しく怖ろしかったと、母は言っていた。「となりの病室では、看護婦にまかせきりで、ついに死んでしまったが、和夫はなおってよかった、とよろこんでいた。」（前掲30頁）和夫がようやく治って帰宅すると、姉、兄、弟と妹が相次いで腸チフスにかかる。母は土蔵の中にきょうだいを隠し、薬屋から買ってきた犀角（漢方薬）を煎じて飲ませたり血清注射を打ったりと、避病院で見よう見まねで覚えた方法で治療する。村人から恐れられていた駐在所の巡査が「この家には病人がいると聞く」と母を詰問するが、「皆元気で畑に桑摘みに行っている」と平気な顔で引き上げさせた。きょうだいは隔離病棟へ送られずに済んだ。

こんなこともあった。急に目が痛みだして隣村の医者のところへ行った。その医者は岡山医学専門学校（現岡山大学医学部）出身だったが、どういうわけか「ヤブ医」と呼ばれていた。あいにく不在だったので、帰宅して母に目の痛みを訴えた。

それならきっとマラトというのだよ。いい療法がある。背中に蚤にくわれたような痕があるはずだから、それに穴のあいた一文銭をあて、あんどんの灯火に、菜種油をつけて、パチン、パチンとやれば、すぐになおるときいているがとの話。（そのころ

は、田舎も、もうランプの時代だったが、私の家にはまだ、ランプのほか
に、古いあんどんもあり、銅貨、銀貨のほか、一文銭もあった。）

(前掲31頁)

目の中がズキンズキンと痛む。母の言うマラトの治療法以外には
さしあたり方法はない。実際やってみると熱さを感じない。お灸
の一種だろうか。目の痛みはすっかり治ってしまった。大学1年の
夏休みと1926年の夏にもマラトにかかった。母は菜種油にあん
どんの火をつけてパチンパチンと焼いてくれた。

後に栃木や山形出身の友人たちと四方山話をしているとき、この
民間療法の話を持ち出すと、自分の郷里でも同じ療法があるとのこ
とであった。

マラトが、今の西洋医学ではどういう学名で呼ばれているの
か、また、その療法はどうか、私はまだつまびらかにしない
が、右のように、きわめてかんたんで、しかも、よくきく療法
を、私の母が、いなかで、きちんと心得てくれたのには、おど
ろいた。

これも、私にとっては、いつまでも忘れられぬなつかしい母の
おもいでの一つである。

(前掲32頁)

晩年、母は体調を崩す。大阪の女子専門学校を中退して帰郷し
た逸子が母の看病をすることになる。福本は獄中で母の死去を知り
慟哭する。母の死から21年後に「この母の愛情にわたしはこたえ
るすべがないのである。」(前掲29頁)と自分の親不孝ぶりを嘆く
のである。

モチノキは東北地方から朝鮮半島、台湾、中国中南部に分布す
る。福本は樹皮をはぎ取って鳥モチを作ってよく遊んでいた。島崎
藤村は紀行『山陰土産』(1927年)で「偶然にも、私達はその自
然の休息してゐる夏の季節を選んで、山陰道の海岸に多い「もち」
の樹の葉蔭を楽しみに来たわけだ。」(青空文庫)と書いている。
福本は、自然主義作家の細やかな観察に感心する。

モチの木より多いのが生け垣などに用いられるネズミモチであ
る。形、色、大きさがネズミの糞にそっくりである。葉はモチの葉
に似て少し柔らかい。

この葉のそう古くないのを、巻いて吹くと、ピーピと鳴るの
で、ピーピの葉とよぶのが、方言名である。私なども、少年の
ころ、よくこれを吹いたものであった。そしてネズミモチなど
という名称はしらず、もっぱらピーピの木、ピーピの笛といっ

ていたもので、なつかしい思い出の葉笛だが、植物図鑑はもちろんのこと、随筆的な植物書にも、私はまだピーピの方言とか笛について記したものをみたことがない。前述藤村の『山陰土産』にも、ピーピのことはついにみのがされ、聞きもらされているのを、物たりなくおもう。私は故郷を思うたびに、このピーピの笛をおもいだしては、田舎の少年をおもいうかべる。

(前掲33—34頁)

マラト、ピーピへ向かう福本の視線は民俗学的な関心と交錯する。柳田國男に教えを乞う素地がそこにはある。

中学に進むまでの福本の思い出は、上述の他には、屋敷内に植わっていた梨とリンゴのさまざまな品種のこと、母の村は天神川の左岸に位置しており村の祭神が菅原道真であること、北条尋常高等小学校的の優等賞でもらったのが菅原道真の伝記であったこと（後年、道真に私淑した大隈重信が倉吉町に立ち寄って演説したのを聴いたが、開口一番の言葉「わーがーはい（我が輩）」しか覚えていないこと）、などである。

福本は1902年に北条尋常小学校に入学、1909年に卒業して、開設したばかりの鳥取県立倉吉中学校（現倉吉東高校）に片道6キロの道を徒歩で通った。

倉吉中学校が創立されたとき、鳥取県内の旧制中学校（男子校）は、鳥取中学校（県立、1873年創立、現鳥取西高校）、米子中学校（県立、1899年創立、現米子東高校）の2校しかなかった。

倉吉中学校の開校は自宅から通えることを意味した。倉吉出身で一回り年上の橋田邦彦（医学者、第2次近衛内閣・東條英機内閣の文部大臣、1882—1945）は第一高等学校、東京帝国大学の先輩だが、わざわざ鳥取に下宿して中学校に通わなくてはならなかった。

自慢話は割り引いて聞く必要があるが、成績順位をコントロールできるかはさておき福本は勉強がよくできたようだ。

私は小学のはじめから中学のおわりまで、一番でとおしたが、一番になっていると、どんな課目でも毎日勉強をしてゆかねばならぬ、というのは、名ざされて、だれも答えができない場合、いつも、では、福本どうかネ、と一番にまわってくるからである。それで私は、高等学校ではもう一番になるまい、四、五番にいて、気らくに、好きな課目に精力を集中したいと考えた。そして、予定のとおり、英法科七〇名のクラスを五番で卒業した。……一高時代はきわめてのんきにのびのびした気持で勉強できた。

(前掲51頁)

倉吉中学校での思い出に登場するのは同級生のY君と前田寛治である。（福本は、原則として歴史的人物を除いては人名に「氏」「君」を付ける。前田についても必ず「君」付けて呼ぶが、ここでは前田、前田寛治と「君」を略すことにする。）

Y君は『万朝報』^{よろずちやうほう}（1882—1940年）を読んでおり、新聞紙上に連載された黒岩周六（涙香、1862—1920、自由民権運動家、小説家、ジャーナリスト）や茅原華山（1870—1952、「民本主義」の語を最初に提唱し、大正デモクラシーで若者たちに影響を与えたジャーナリスト）の本を愛読していた。黒岩涙香が創業した『万朝報』は権力者のプライバシーやスキャンダルを暴く取材方法で人気を博し、第3面にはゴシップ記事を載せたことが「三面記事」の語源となった。

背伸びして大人の世界を覗こうとしていたY君の愛読書は、涙香や華山の他には『韓非子』であった。中国戦国時代の思想家である韓非子は、徳治主義の儒家に対抗して法治主義を説いた法家である。

ある日、学校で『韓非子』を読んでいたところを国漢（国文と漢文）の先生に見つかってしまう。『論語』『大学』『中庸』『孟子』といった四書であれば褒められたのだろうか。先生は、『韓非子』は異端の書である、と烈火のごとく怒ったという。

福本は『万朝報』にも『韓非子』にも全く興味がなかった。もし読んでいたら、この先生の時代錯誤ぶりに立腹し、法律と秩序、制度設計を重視した法家思想は異端ではない、と反発しただろう。

こういった方面の読書では、Y君が飛びはなれた先駆者で、私などはとうてい彼と比べ物にならなかった。Y君は六高（第六高等学校、現岡山大学—岩田注）に入学し、弁論部で鳴らし、私は一高に入ったが、いわゆる弁論家などはいかにけいべつしきって、いわゆる飛ばず鳴かずに三年を送った方の組であった。

（前掲39—40頁）

福本は獄中で『韓非子』全巻を初めて読む。2回読み返し、出獄後も精読玩味する。「そのたびに、中学でY君が『韓非子』でひどくしかられたことを、ひそかに思いだしては、微苦笑を禁じえなかった。」（前掲40頁）

なぜ福本は、わざわざY君のことを述懐したのか。微笑ましいエピソードと読むべきだろうか。否、そうではあるまい。

マルクス主義の新しい理論を日本にもたらし、再建日本共産党の中心人物として「福本イズム」によって昭和思想史に名を遺した人物であれば、遅くとも中学校時代からは社会の下層の人々の困窮し

た生活に怒りを覚え、高校大学と理論的社会的闘争の場に身を置いたに違いない。

しかし、福本はふた昔前の言葉を使えば「ノンポリ」、すなわち政治運動に無関心な学生であった。社会問題に興味を持たなかった自らの未熟さを告白し、早熟だったY君に敬意を表したのであろう。

東京美術学校（現東京藝術大学）に進学することになる前田寛治（1896—1930）とは中学時代はさほど話をしたことがなかった。終生の親友になったのは上京後であった。本郷の東京帝国大学と上野の東京美術学校とは徒歩で約15分の距離にあり緊密な交流があった。留学時はパリで、帰国後は東京で、頻繁に行き来する仲であった。

前田は福本より2歳年下である。当時も現在も小学校入学年齢は6歳であり、初等教育就学率は99%を超えている。福本は8歳で小学校に入学している。いつ入学させるかは各家庭（家長）の判断に任されていたのだろうか。

前田は中北条村（現北栄町）国坂出身である。福本の生家のある田井からは東に約800メートルのところにある。

いまでも私の記憶にはっきり思いうかべることのできるのは、入学式の日よりすこしおくれて、私のクラスに前田がひとり入ってきたチビ助の前田の印象である。ありていにいうと、後年その奇才を一世にうたわれた前田寛治画伯も、中学はあわれ補欠入学だった。そして尻から、一、二番のチビ助であった。

これが、四年生のころから急に駆足で伸びだして、先頭にちかくならぶようになった。のちにかれの私に語ったところによると、中学時代から絵はひじょうに好きだったそうだが、中学においては最後まで、図画の成績もべつにいい方ではなかった。かれが美術学校に入学したということは、中学の同級生をびつくりさせたほどであった。だが、美術学校も実はまた、みごと補欠入学ですべりこんだということであった。（前掲40頁）

チビ助とか補欠入学とか、この部分だけを読むと悪意を感じる人がいるかもしれない。もちろん、そうではない。福本は、10年に満たない画業の中で「前寛ばり」と呼ばれたフォービズム的画風が一世を風靡した傑出した才能を惜しみ、深い愛情をもって前田の思い出を語るのである。

先ほど、橋田邦彦について少し触れた。橋田が生れたのは倉吉町の研屋町か堺町である（市制施行で倉吉市になるのは1953年）。一高、東京帝大医学部、ドイツ・スイス留学を経て、医学部生

理学教室教授、近衛・東條内閣文相を歴任し、敗戦直後に自決する。

福本は下北条村田井生れ、前田は中北条村国坂生れである。田井と国坂の間は800メートル、研屋町から田井まで7キロ弱。当時、倉吉中学校の敷地は堺町にあった。福本と前田の中学時代、橋田が帰郷するとき、この3人はすぐ近くにいたことになる。

医学部特有の急勾配の階段教室がある本館と福本が通った法文一号館の間は250メートル、東京美術学校と医学部とは1キロ余り。本郷から上野へ、上野から本郷へ行くことは珍しくない。

私は大いに驚いている。戦前のある時期、異なる分野でトップランナーだったこの3人が、狭い範囲に生を享け、倉吉や東京で何度もすれ違ったかもしれない偶然に、である。